

『大乘四論玄義記』における前代教学の批判 ——「三乗義」を中心として——

菅 野 博 史

1. 問題の所在

『大乘四論玄義記』（以下、『四論玄義』と略記する）は、崔鋁植氏の『校勘 大乘四論玄義記』¹⁾が刊行されて、新しい研究段階に入ったと言える。判読しにくい文字や誤読・誤写と考えられる文字について、具体的に新しい読みの可能性を提案しているので、大いに参考となる。しかしながら、崔氏の努力にもかかわらず、きわめて読みにくいテキストであることに変わりはない。今後、地道な本文の内容研究が待たれるところである。

筆者も吉蔵思想の研究の一環として、また南朝の仏教に対する豊富な情報を含むテキストとして『四論玄義』に関心を寄せてきた。本稿では、現行本『大乘四論玄義記』巻第十に含まれる「三乗義」（他に「莊嚴義」「三位義」が収められている）を選び、そこに含まれる、前稿²⁾で指摘した「地摂両論成毘二家」（『十地経論』・『撰大乘論』・『成実論』・『阿毘曇論』に基づく学派を意味する）に代表される前代教学に対する『四論玄義』の批判について考察を加える。順序として、第二節において、「三乗義」の構成と内容について簡潔に説明し、第三節において、前代教学の批判を具体的に取りあげる。

2. 「三乗義」の構成と内容

「三乗義」は、次に紹介するような段落分けが示されているけれども、全体的にしっかりと組織立てられているとは言えない。そのために、文脈の理解は容易ではなく、文字の誤読・誤写が多いことも、読解をさらに困難にしている。本稿で引用する文も、理解できない箇所があることを、あらかじめお断りしておく。

さて、「三乗義」は、「三乗義有四重。第一釈名，第二出体，第三広料簡，第四明五乗。」（『大日本統蔵経』1-1-74-1, 86d3-4, [崔本]³⁾ 499. 2-4）とあるように、4章によって構成されている。

第1章の「釈名」においては、三乗の内容である声聞、縁覚、菩薩の意味についての解説と、乗の意義について、開発釈名、当体釈名、表理釈名の三義を提示している⁴⁾。

第2章の「出体」は、乗の体についての議論で、『四論玄義』は「正法」を乗の体としている。

第3章の「広料簡」は、「第三広料簡有四。」(87c6, [崔本] 502. 2-3) とあるが、その細字割注として「第一辨（←無 [崔本]⁵⁾）体。四門料簡。第二明三乗。第三明乎乘至不至。第四広雜料簡。」(87c6, [崔本] 502. 3) とあるように、4節によって構成されている。

第1節は乗の体についての問答である。摩訶衍＝大乘を明らかにするのに、一家の相伝として、人法、因果、出生收入、能所の四門に分けると述べている。これを「四門料簡」と表現しているのである。とくに出生と收入については、三乗（または五乗）と一乗の関係をめぐる問題を扱い、会三帰一、破三帰一、開三帰一、廢三立一について説いている。

第2節は三乗についての問答である。この節は、「第一明三乗十地、第二明二乗有無。」(91b13, [崔本] 517. 15) とあるように2項に分かれる。さらに、第1項の三乗の十地を明かす段は、「第一明名義、第二辨体相。」(91b14, [崔本] 517. 15) とあるように2段に分かれる。また、第2項の二乗の有無を明かす段は、「第一明有無、第二明証有無。」(92d16, [崔本] 525. 5) とあるように2段に分かれる。前者においては、二乗が存在するか存在しないかという二つの説をそれぞれ紹介し、後者においては、それぞれの説の根拠を紹介している。とくに二乗が存在しないという証拠を10箇条挙げている⁶⁾。

第3節は、「第三明乎乘至不至」と名づけられていたが、該当の箇所には、「第三明一乗義、有阿。」(96a1, [崔本] 542. 13) とある。つまり、第2節が三乗についての議論であったのに対し、第3節は一乗についての議論であるということである。さらに、その細字割注として「第一明乘至不至仏、第二論乘功用。」(同前) とあるように2段に分かれる。前者においては、一乗によって仏の境地に至ることができるか、至ることができないかという問題を議論しており、後者においては一乗の運載の作用について議論している。

第4節は、料簡の前の3節に含まれない広範で種々の問答を取り扱っている。

第4章は、「五乗を明かす」、あるいは、「五乗の義を釈す」であり、人乗・天乗・声聞乗・縁覚乗・仏乗についての議論が示される。

(62) 『大乘四論玄義記』における前代教学の批判（菅 野）

以下、「三乗義」の段落分けを理解の便宜のために図示する。

1. 釈名（86d5, [崔本] 499. 4）
2. 出体（87b3, [崔本] 500. 17）
3. 広く料簡す（87c6, [崔本] 502. 2）
 - 3.1 乗体を辨ず（87c7, [崔本] 502. 3）
 - 3.2 三乗を明かす（91b13, [崔本] 517. 14）
 - 3.21 三乗十地を明かす（91b14, [崔本] 517. 15）
 - 3.211 名義を明かす（91b15, [崔本] 517. 15）
 - 3.212 体相を辨ず（92a11, [崔本] 521. 6）
 - 3.22 二乗の有無を明かす（92d16, [崔本] 525. 5）
 - 3.221 有無を明かす（92d16, [崔本] 525. 6）
 - 3.222 有無を証するを明かす（94b9, [崔本] 533. 7）
 - 3.3 一乗を明かす（96a1, [崔本] 542. 13）
 - 3.31 乗の至・不至を明かす（96a2, [崔本] 542. 13）
 - 3.32 乗の功用を論ず（97b12, [崔本] 549. 4）
- 3.4 広く雑えて料簡す（98a5, [崔本] 552. 6）
4. 五乗を明かす（100c3-101a14, [崔本] 563. 12-566. 16）

3. 前代教学の批判

「三乗義」においても、「地摂両論成毘二家」やそれと類似した表現によって前代の教学を引用・批判し、それと対照的に自己の無所得の思想的立場を明らかにする例がおおよそ40箇所を数える。紙数の関係で、前稿⁷⁾で指摘した「地摂両論成毘二家」の批判の主要な論点である「有所得」と仮理の関係、教判の問題について『四論玄義』の批判を紹介する。また、前代教学の批判とは直接関係しないが、「三乗義」の問題として、『法華経』方便品の「無二亦無三」についての興味深い解釈を紹介する。

(1) 無所得・有所得と仮理について

俗諦を仮理とし、真如等については仮ではないとする地摂両論成毘二家に対して、『四論玄義』はいずれも仮理であると主張している。二乗の悟りをめぐって、問。此二乗亦得言悟道理耶。

答。得言悟仮理。故大經陳如如得須機文云⁸⁾。応仮理也。此理道望不二理, 終是教能表也。

如地（←持〔崔本〕）撰成毘家宗，俗諦為応仮理，真如等不得応仮理。今大乘宗並是応仮理也。（87c7-8,〔崔本〕500.1-4）

とある。声聞・縁覚が道理を悟ると言うことができるのかという問題について、仮理、応仮理を悟ると答えている。また、この二乗が悟る道理は不二の理と対照すると、能表の教に当たると述べている。応仮理の応仮は、ここでは「応に仮なるべし」という意味ではないように思われ、C-BETA による検索に基づけば、「応仮非実」（『成唯識論』巻第一，T 31. 2b26 など⁹⁾）、「真実応仮」（『金剛經纂要刊定記』巻第七，T 33. 223c15）、「法身真実丈六応仮」（『注維摩詰經』巻第二，T 38. 343a17）という用例が見られるので、意味としては真実と対語であり、仮と同義と推定される。あるいは、「応仮」は「虚仮」の誤読・誤写である可能性も考慮する必要がある¹⁰⁾。

「地撰成毘家宗」では、俗諦を応（虚）仮理，真如等を応（虚）仮理ではないと主張するのに対して、「今大乘宗」と表現される『四論玄義』の無所得大乘の立場では、俗諦も真如等もいずれも応（虚）仮理と規定している。これは、「地撰成毘家宗」が俗諦を仮理，真諦を真理と截然と実体的に区別するのに対して、『四論玄義』は、俗諦，真諦ともに仮理に基づく方便の言説と見なすことを意味しているであろう。ここと類似の記述として、『四論玄義』「二諦義」に、

但有所得家言，有為世諦，有此虚仮理。無為真諦，有此無名無相理。（25a13-14,〔崔本〕193.14-16）

とある。有所得家では、有は世諦であり虚仮の理とし、無は真諦であり無名無相の理として、截然と実体的に区別することを紹介している。また、このような虚仮の理と真実の理という図式は、次の記述に明瞭に見られる。

但如地撰兩論成毘二家，存心意便云，心意為仏因。各執謂有道理，応妄（←忘〔崔〕）理。応仮理真如理真諦理差別。故今破除之，言歸一大乘。（88d7-9,〔崔本〕）

と。ここでは、「地撰兩論成毘二家」が、応（虚）妄¹¹⁾，応（虚）仮の道理と，真如，真諦の道理を截然と実体的に区別することを紹介している。

応（虚）仮理や仮理と言うと、何か悪い意味を持っているように感じられるが、そうではない。縁覚の悟りについて、

観因縁，仮有有有，仮無不無無。応仮理。（86d13-14,〔崔本〕499.12-13）

とある。仮有は不有に裏づけられた有であり、仮無は不無に裏づけられた無であり、つまり有、無を実体化しない考えを述べ、それを応（虚）仮理と表現している。したがって、応（虚）仮理は、理の実体化を否定した考えを示しているのもであって、偽りの理といった悪い意味ではない。また、縁覚の悟りの描写に、実体化を免れ

(64) 『大乘四論玄義記』における前代教学の批判（菅 野）

た理の悟りを用いているのは、『四論玄義』は無所得を大乘に限るのではなく、無所得の小乗を認めるからである。『四論玄義』は言うまでもなく、大乘の無所得を根本的立場としているのではあるが、無所得の小乗について、次のように述べている。

問。如二乘人衰（←衰 [崔本]）教不了，成有所得者，可得言都不称教者，仏何意説小乗教耶。

答有二義。一者聞初説二乗教時，當時未為失。但遂守教轉成病。如三脩比丘前衰（←衰 [崔本]）苦無常教，皆得阿羅漢道。未為失之。如当教悟解也。但後時隨縁執教，謂為実有二乗。故被破也。二者如仏為破外道，説二乗教。如教悟解有不有無不無，謂為究竟。彼（←破 [崔本]）名為二乗曲見也。此二種意異者，初則如教悟解無所得小乗。但久後隨縁落有所得成病。後（当を削る [崔本]）則如当教悟解。阿（難を削る [崔本]）羅漢等而謂為究竟道，故名為曲。已成病落有所得，為失也。（89c15-d7, [崔本] 510.5-15）

と。難しい箇所もあるが、小乗の教えを聞いて悟る二つの場合を説いている。第一の場合は、最初に小乗の教えを聞いて悟る、その段階では無所得の小乗を悟ったとするのである。この場合は、後に教えに執著して、有所得に落ちるのである。第二の場合は、小乗の教えを聞いて阿羅漢を得た段階で、同時に有所得に落ちる場合である。前者の場合、「無所得小乗」という立場を認めているので、縁覚の悟りの説明に、『四論玄義』の根本的立場である「応（虚）仮理」が出るのも必ずしも奇妙なことではないのである。

なお、有所得といっても全否定されるのではなく、無所得への準備段階として機能する場合も次のように認められている。

一家相伝判，有所得善，不得無所得善習因。有所有虚妄善故。然藉有所得，為無所得，作次第縁増上縁等也。而仏菩薩勸令修有所得善根相者，有所得善生於人天。人天是入道之器。亦名不定聚。並値仏菩薩，解無所得説法。因此得悟無所得。是故有所得，但為無所得作縁由等也。（89c4-10, [崔本] 509.15-20）

と。有所得の善が人天に生ずることをもたらし、そこで仏・菩薩と出会い、その説法を聞いて無所得を悟ることが可能であるから、有所得が無所得にとってのきっかけとなることを認めているのである。

(2) 教判について

「三乗義」においては、諸大乘經典が共通に会三帰一を明かすことを踏まえて、經典間の相違について議論するとき、教判の問題に論及する結果となっている。まず、

問. 涅槃法華大品夫人等經, 並明會 (←無 [崔本] 三歸一. 若為取異耶 (←取耶異那 [崔本])).

答. 若成毘二家釈云, 大宗明之, 大品經正明空. 明空蕩相. 法華經會 (←無 [崔本] 三歸一, 明壽量果. 夫人經偏方之說, 即是說頓, 辨一乘. 与大經齊一. (90a7-10, [崔本] 511. 14-18)

とある. ここでは, 成毘二家の解釈として, 『大品般若經』は空を明かし, 『法華經』は會三歸一と壽量果 (如来壽量品に説かれる壽命長遠な仏果) を説き, 偏方不定教とされる『勝鬘經』は頓教, 一乘を説く点で, 『涅槃經』と同一であると述べられている. そのうえで,

但馮觀二師為執四五之異說, 前三与四說猶是無常半字教. 如夢覺義中說. 彼家明法教釈, 一乘不同也. (90a11-13, [崔本] 511. 18-20)

とある. 馮師¹²⁾と道場寺慧觀の二師は, 漸教を四時や五時に分類する説に執著して, 四時の場合は前の三時, 五時の場合は前の四時の教法を無常半字の教と捉えることを指摘している. これに対して, 『四論玄義』の立場からは,

涅槃大品乃 (←及 [崔本]) 至夫人等經, 以明一乘. 其事無二. 涅槃亦非半非滿. 隨於涅槃非 (←□ [崔本]) 三非一而明三一. 般若亦非半非滿, 明於三一非滿. □於般若及至勝鬘亦然. 涅槃亦非常非無常, 般若亦非常非無常, 乃 (←及 [崔本]) 至法華夫人亦然. 是諸大乘非明一乘義一種齊. (90a13-18, [崔本] 512. 1-5)

と述べられる. 『法華經』は言うに及ばず, 『涅槃經』『大品般若經』『勝鬘經』なども一乘を明かす点では共通である. 上に紹介した成毘二家の解釈では, 『涅槃經』以前の大乗經は無常半字と規定されたが, 無依無得宗では, 非三非一, 非常非無常, 非半非滿という相對概念の両者を否定した上に立って, 相對的次元で, 三一, 常無常, 半滿を方便として説くと主張していると思われる. 末尾の「是諸大乘非明一乘義一種齊.」は意味不明である. 諸大乘經典が一乘を説く点では共通であるとする引用文の冒頭の記述と矛盾しているように思われるからである.

さらに, 『四論玄義』は教判の議論を続けて次のように言う.

今明滿字教貫通諸 (←法 [崔本]) 摩訶衍經. 經題是摩訶衍也. 故以明一乘無二悉是滿字. 不同成毘二家云, 大品及法華是大乘, 而非滿字教. (90a18, [崔本] 512. 5-8)

と. 成毘二家が『涅槃經』以外の大乗經を滿字教と認めないのに対し, 『四論玄義』は, 一乘無二は滿字であり, これは諸大乘經典に貫通していると主張している. 要するに, 『四論玄義』も吉藏の「諸大乘經頭道無異」¹³⁾の思想と同じく, 諸大乘經典の平等性を指摘していることになる. この点について, 『四論玄義』は,

(66) 『大乘四論玄義記』における前代教学の批判（菅 野）

一家相伝云、一乗只是仏性、只是般若。是故亦名為第一義空、亦名為般若、亦名仏教性、亦名涅槃、亦名為一乗。是故般若涅槃同諸（←礙法 [崔本]）摩訶衍經、以明其宗致是一也。（90b18-c3, [崔本] 513. 8-11）

と述べている。諸大乘經典に説かれる重要な概念の同一性を指摘したうえで、諸大乘經典の宗致が一であることを主張している。これについて、さらに一問答を設けて、

問。若為得知是大乘摩訶衍教宗無二耶。

答。如地摂両論成毘二家、以明諸法実相、並是虚妄実実相言、今宗表是復上辨諸法（←皆比 [崔本]）実相。亦是落有所得、理外行心、故被破也。（90c4-7, [崔本] 513. 11-14）

と述べている。質問はまさしく諸大乘經典の宗が無二である、つまり唯一であることを繰り返している。答えの内容はよく分からないが、地摂両論成毘二家の諸法実相の理解が有所得に落ち、心を理の外に行ずる、つまり道理から外れているので論破されることを指摘したものと思われる。

(3) 『法華經』方便品の「無二」「無三」の解釈

『法華經』方便品の「十方仏土中 唯一乗法 無二亦無三 除仏方便説」(T 9. 8a17-18) の「無二」「無三」について、それぞれ第二の乗である縁覚乗がない、第三の乗である声聞乗がないとする第一説と、それぞれ声聞乗と縁覚乗の二つの乗がない、声聞乗、縁覚乗、菩薩乗の三つの乗がないとする第二説があるのは周知の事実である。『四論玄義』は、吉蔵と同じ解釈である第一説¹⁴⁾を提示するばかりでなく、第二説も提示している。すなわち、第一説として、

故法華經方便品、及偈言、十方仏土中、唯一乗道、無二亦無三也。無二、無第二辟支仏乗。亦無三、無第三声聞乗。（93a16-18, [崔本] 526. 9-11）

とあり、第二説として、

故法華云、十方仏土中、唯一仏乗。無二亦無三也。又經亦言、唯此一事实、余二則非真也。言無二者、一大乗外、無別声聞縁覚二乗也。言無三者、一大乗外、無別声聞縁覚二乗、并無有随縁化偏行所設大乘也。（98a11-15, [崔本] 552. 13-17）

とある。ここには、「一大乗」という語句が見られ興味深い¹⁵⁾。第二説の引用文の後に、次の問答が示される。

問。直説無三時、無二已所含（←□□ [崔本]）。復何得別説無二（←無二無二 [崔本]）耶。

答。声聞縁覚二乗者、是大乗家対説偏悟仮有不有仮無不無、二乗也。大乘亦有二種。

一悟仮有不有仮無不無，修万行菩薩大乘。二悟有不有無不無，円悟中仮，方是実大乘。亦得言前権大，後是実大。亦得言如言三阿僧祇劫。但修六度，不修習諸地無漏。次於百劫修相好業，隨業明之，名為権大。破此権大，并破余小。是故言一也。（98a15-b4, [崔本] 552.17-553.5）

と。これによれば，大乘に権大と実大を分け，「無三」は権大と「余の小」（声聞乗と縁覚乗）を破すると解釈している。「無二」「無三」について二説を紹介しており，一貫性はないが，第二説については上記の問答が設けられており，こちらの解釈に，より親近感を持っていたのであろうか。たとえば，『法華文句』においても二説を紹介しながら，自分の解釈（第二説に相当）を提示しているが，『四論玄義』では，どちらかの説を自説として強く主張する点は見られない。確かなことは分からないが，興味深い事実なので，紹介しておく。

- 1) 慧均撰・崔鉉植校注『校勘 大乘四論玄義記』（金剛學術叢書 2，金剛大学校仏教文化研究所，2009年6月）を参照。
- 2) 拙稿「『大乘四論玄義記』の基礎的研究」（『印度学仏教学研究』57-1, 2008.12），同「『大乘四論玄義記』の研究序説—自己の基本的立場の表明」（『불교학리뷰』5, 2009.6）を参照。
- 3) 崔鉉植校注『校勘 大乘四論玄義記』を「崔本」と略記する。「499.2-4」は，499頁2～4行を意味する。
- 4) 「通乗者，一家相伝云，有三義。乘是入義，入是出義。開發積名義。二当体積名。乘是運出之義。三表理積名。乘是不二義。」（87a18-b2, [崔本] 500.14-16）を参照。なお，拙稿「慧均『大乘四論玄義記』の三種積義と吉蔵の四種積義（『木村清孝博士還暦記念論集・東アジア仏教—その成立と展開—』所収，2002.11，春秋社）において，『大乘四論玄義記』には，吉蔵の四種積義とほぼ同様の解釈方法が見られることを指摘し，『四論玄義』の「仏性義」の用例を示したが，この「三乗義」にも見られた。また，「二諦義」にも，「若以義積名，有三種勢。一横論顯発，二豎論表理，三当体積名。」（20d10-11, [崔本] 178.13-15）と見られることを付言しておく。なお，「横論顯発」「豎論表理」は，他に『大乘玄論』論述義にのみ見られる（T 45.75c10）。
- 5) 「辨（←無 [崔本]）」は，[崔本]によって，続蔵本の「無」を「辨」に改めることを意味する。以下同じ。
- 6) 第9条が欠けている。
- 7) 前注2を参照。
- 8) 『南本涅槃經』卷第三十一，迦葉菩薩品，「吾今此身有老病死。云何名為世諦說為第一義諦。如告憍陳如。汝得法故，名阿若憍陳如。是故隨人隨意隨時。故名如來知諸根力。善男子。我若當於如是等義作定說者，則不得稱我為す如來具知根力。善男子。有智之人當知香象所負非驢所勝。一切衆生所行無量。是故如來種種為說無量之法。」（T 12.810c12-18）の箇所を指すと推定される。

(68) 『大乘四論玄義記』における前代教学の批判（菅 野）

9) 「応仮非実」の用例は、すべて玄奘訳とその注釈書の用例である。

10) 「応仮理」には他の用例が見られるものの、むしろ「虚仮理」の誤読・誤写ではないかという推論もありうる。同様に他書の用例も誤写の可能性がある。『大品経遊意』には、開善寺智蔵の理論の変遷について、「而開善義、在東山時、説五方便皆縁於仮理。故第一法与苦忍不為習因也。還陽州時云、五方便皆縁於真。故縁仮解対、退不伏進不斷。而死時云、先説謂得。」(T 33. 64b14-18) と紹介している。ここに、「仮理」と見えるが、ほぼ同じ内容を伝える『四論玄義』には、「又論師開善云、於五方便与三十心中縁境、前後釈不同。法師在東山時釈云、並縁虚仮理也。中出揚州（←陽洲 [崔本]）時云、縁真不秤縁。近臨死時定云、是縁虚仮理。」(4d3-6, [崔本] 279. 9-12) とあるように「虚仮理」と言い換えられている。後注 11 も参照。

ちなみに、『大品経遊意』と『四論玄義』とが他に見られないほぼ同じ情報を伝えていることは、『大品経遊意』が吉蔵の著作ではなく、『四論玄義』の著者である慧均の著作であるとする伊藤隆寿氏の推論の一つの傍証となるかもしれない。伊藤隆寿「弥勒経遊意と大品経遊意」(『印度学仏教学研究』22-2, 1974. 3), 「大品遊意考一構成及び引用経論等に関して一」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』7, 1975. 9), 「大品遊意考(続) 一経題釈を中心に一」(『駒沢大学仏教学部論集』6, 1975. 10), 「『大乘四論玄義記』に関する諸問題」(『불교학리뷰』5, 2009. 6) を参照。

- 11) 応妄の用例は、『四論玄義』「三乗義」に、「一往対地摂等四家有応仮応妄世諦中有異、故明人法等不二也。」(88b2-3, [崔本] 504. 15-16) と見える。また、別の箇所には、「如地摂両論成毘二家義宗、有虚仮（←任 [崔本]）与虚妄両世諦。有故悉落理外有所得。」(100c10-11, [崔本] 564. 7-9) とあるので、応妄も虚妄の誤読・誤写の可能性がある。そうであるなら、また、応仮も虚仮の誤読・誤写の可能性が大きくなる。
- 12) 馮師は、吉蔵『百論疏』巻第三に、「如子前有宋代馮師用之。」(T 42. 292b14-15) とある。慧観が五時教判の提唱者として有名であるから、馮師は四時教判を説いたのであろうか。四時教判については、伊藤隆寿氏によって慧均の著作と推定された『大品経遊意』には、「諸法師作四教。阿含為初。波若維摩思益法鼓楞伽等為第二。法華為第三。涅槃為第四。」(T 33. 66b15-17) とある。
- 13) たとえば、吉蔵『法華玄論』巻第二、「諸大乘経顕道、乃当無異。」(T 34. 378c14-15), 『法華義疏』巻第五、「諸大乘経顕道無二。」(T 34. 518c16) を参照。
- 14) たとえば、『法華義疏』巻第四、「前明無二謂無縁覚、無三明無声聞。」(T 34. 502 b5) を参照。
- 15) 『法華経文外義』に「一大乗」という語句の見られることを、聖徳太子の『法華義疏』の真偽問題との関連で指摘したことがある。「『法華経文外義』研究序説」(『印度学仏教学研究』55-1, 2006. 12) を参照。

(本研究は、科学研究費補助金「基盤研究 (C) 19520055」による研究成果の一部である)

〈キーワード〉『大乘四論玄義記』, 慧均, 三論宗, 地摂両論成毘二家, 「三乗義」

(創価大学教授, 文博)